

長崎新聞

発行所
長崎新聞社
長崎市茂里町3-1 〒852-8601
©長崎新聞社2017

3月10日 (金) 友引

(旧暦2月13日)

総合案内 (095) 844-2111
報道部 (095) 846-9240
広告部 (095) 844-4874
事業部 (095) 844-5261

私たちの最期は

〈8〉

第8部 旅立ちの介護

サービス付き高齢者向け住宅(サ高住)の「銀木屋」を首都圏6カ所で運営する千葉県浦安市の「シルバード」社長、下河原忠道(45)は事業開始に当たり、入居者をもとめることは想定していなかった。終末期のケアに取り組むようになったのは、ある女性に背中を押されたからだ。

「そこが気に入ったわ。私はここで死にたい」
2011年7月にオープンした同県鎌ヶ谷市の「銀木屋鎌ヶ谷」。入居契約第

1号となったのは、末期の乳がん患者で70代半ばの女性だった。

「そう言われても…困ります」。下河原は建築業界から介護に参入したばかり。みとりの経験がないことを正直に伝えたが、相手は折れない。

女性は長年、看護師として働いていた。「本来、人が死ぬ場所は病院ではない。病院は元気になる場所なのよ」と諭すように話した。宅は、人が亡くなっていく



サービス付き高齢者向け住宅「銀木屋鎌ヶ谷」
= 2月、千葉県鎌ヶ谷市

花が枯れていくように

場所になる。頑張りなさい」
女性は一切の延命治療を断り、訪問診療と訪問看護のサービスを組み合わせ使

い、3カ月後に亡くなった。その間スタッフは手探りで支援を続け、みとりの基礎を学んだ。この初体験が今につながる銀木屋の下地になっている。

みとりの実践を積み重ねる中、入居時の意向確認シートに「医師に回復の見込みがないと診断された場合、最期の時をどのように過ごしたいとお考えですか」と尋ねる項目を設けることにした。

銀木屋鎌ヶ谷の所長、松丸晃一郎(50)は「住宅でできる医療は限られているが、苦しまずに安心して人生を全うできる着地点を見

「美しい花が枯れていくように、住み慣れた場所です、自然に緩やかに最期を迎えられれば」

原点は、入居第1号の女性が見せてくれた旅立ちの姿にある。(敬称略)

第8部おわり